

生きたいと思う命

詩集 下巻

越川美佐子



生きたいと思う命

詩集 下巻

越川美佐子

表紙 風化

「命とは」	199	居場所
174 影踏み	200	巨峰を
175 雪道	201	心のスナップ写真
176 月見草	202	命は (1)
177 猫の瞳には	203	命は (2)
178 知らない世界	204	命は (3)
179 眼が見えなかったら	205	命は (4)
180 記憶力	206	命は (5)
181 線は	207	母の日を
182 心の眼	208	妹よ
183 星が	209	妹がいなければ
184 貧しき人々		
185 江の島		「ごちそう」
186 学校の門構え	210	家族として
187 彫刻サークル	211	白猫ナース
188 李さん	212	2年目の春
189 あさしお	213	神様たち
190 夫婦茶碗	214	鼻歌ナース
191 秋川溪谷	215	生きることは
192 思い出の握手	216	命のリレー
193 命の授業	217	呼吸が
194 握手	218	春の予感
195 白い箱の存在	219	その人がいるだけで
196 指導員と彼	220	受け入れる
197 夢の形	221	何よりのごちそう
198 リハビリ	222	物語り

223	蝉	「視点」	
224	死の淵で	246	自分と違うことが
225	心に刻まれる	247	命の伝言
226	何も出来ない	248	薬が
227	受け入れられない	249	あなたに会って
228	ギリギリ	250	昨日の決意
229	もういよいよかと	251	切り替えのスイッチ
230	思いやり	252	逆送している
231	こんなにも	253	看護観
232	もっともっと	254	一人ひとりの
233	楽観	255	何のために
234	全うしたい	256	いつか
235	カブトムシ	257	命を守るって
236	何もしたくない	258	本当は
237	無駄に	259	話してみたら
238	選択	260	心が見えない
239	心の闇を	261	葛藤
240	代わってあげたい	262	ここは
241	生きる	263	何もしない
242	美しい心	264	見守り
243	自由	265	生活を守る
244	ヤル気	266	やっぱり
245	からし	267	心よ鎮まれ
		268	盲点
		269	不公平
		270	信頼は

- 271 深呼吸
272 言葉を知らない
273 私は救われた
274 理屈じゃあない
275 やれるって
276 舞い落ちた花びら
277 命と生きる
278 言葉に逃げられ
279 一石を
280 微力でも
281 何度も
- 「命が輝く時」
282 信じる心が
283 生きることは
284 心は
285 立場に
286 何でも
287 守っているのは
288 よく寄り添う
289 ただただ
290 気づかされた
291 ぷつりと
292 エールの力
293 命を知る
294 想いは
- 295 彼の夢には
296 言葉は
297 この一瞬
298 走り続ける
299 ハンディ
300 ワンハンドの誇り
301 ライバルがいるから
302 挑戦し続ける
303 眼をそらさずに
304 リモートが
305 令和の時代
306 フォークシンガー
307 街の灯り
308 生活するって
309 誰の身にも
310 突然に
311 何があるか
312 人間から生きる命を奪っ
ている
313 ウクライナの花
314 諦めず
315 捨てる心
316 簡単に
317 命あるすべてのものを
失う

「ひまわり」

- 318 癒される心
- 319 行動してこそ
- 320 幸福きっぷ
- 321 時は
- 322 何を感じたんだろう
- 323 それぞれに
- 324 創造力
- 325 そうじ
- 326 花を
- 327 人には
- 328 ひとをしんじれる
- 329 人を育てる
- 330 幸せもん
- 331 仕事を成し遂げる
- 332 最後の振る舞い
- 333 ひまわりの花
 向日葵の花が
 ひまわり
- 334 本が名刺に

命とは

『影踏み』

ランドセルを背負い

学校から家に帰るまでの1キロの道のりを
歩き続けた,,,

雨の日も
風の日も

夏の日照りを背に受け「ジリジリ」と感じながら,,,

一人で帰るつまらなさに「影踏み」を思いついた

自分の影を踏みつけ
半歩先を行けば
半歩影も逃げる

少し早足に
踏もうとすると
また影も逃げる

影を踏みつけ
また踏みつけ
踏み続けると

影が私の背中を押してくれて,,,

いつの間にか
私は家路についていた

『雪道』

もう昔のことだけど,,,

その日は いつもと違う道を歩いていた
長靴の底から8センチぐらいまで道は雪で覆われていた

足を滑らせ
「しまった」と
すでに夕暮れがかった

辺りを見渡しても 誰一人通らない道
「シーン」
「誰か～」
なおさら小さな声になり

ランドセルを背に 一層寂しくなっていた

歩道には雪が積もってる
普通に立ち上がるのも大変なのに

雪にうずくまりながらも

悴む手を擦り
必死に踏ん張った

悴む体を擦りながら
必死に踏ん張った

「私は家に帰るんだ」

その時の記憶に
どう帰ったのか
わからないが,,

でも

「踏ん張る」気持ちが私を救ってくれた

『月見草』

夕ぐれに庭の外れを猫が迷い込み探していると

「カサカサ」という音に気づき
猫を探す手をやめた

月見草は
蛹のように
少し膨らみかかった蕾から
花びらが開くその瞬間を

何か蠢きを感じるような
まるで月の明かりを頼りに

花は「一斉に開き」始めた

私はじっと身を潜め 月見草を見つめていた,,,

その花は
けして豪華とはいえないが,,,

庭先の「月見草」にすっかり私は心奪われていた

『猫の瞳には』

私と暮らしていた猫は

どんな時にも横にちょこんと座っては
私と同じ景色を見ていた

暗がりから飛び出してくる時は
目をサーチライトのように「ピカリ」と光らせ
私に飛び掛かってくる

寂しい時も

寒い時も

眠い時も

「猫の瞳」には私と同じ景色が写っていて

そして必ず 私の顔もその瞳には写っていた,,,

『知らない世界』

もう 40 年も前になる

友達に誘われて

初めて訪れた『盲学校』の友達に会いにいった
それは文化祭だったのかその記憶さえも今となっては曖昧
に,,,

知り合いの生徒に気づき彼は話しかけた

『やー元気かい』

『遊びに来ちゃった』

『よく来てくれたねえ』と

友達のをキャッチすると滑らかな口調で会話が弾む

白棒を持ち廊下の端を「コツコツ」と叩きながら
確認しながらやってきた生徒には見えなかった

廊下をスレ違う生徒たちはさまざま

誰かに手を引かれたり

小さな女の子もいれば年長者もいて,,,

一つだけ共通なことは何かしら

眼に不自由を感じている人々,,,

案内されたのは「パソコン教室」

幾つもあるパソコンは
普通より5~6倍大きいサイズだった
いや もっとかも知れない
弱視でもわかるように作られた『ピアノの鍵盤のような』
キーボード

操作の仕方もさまざま
パソコンの声を頼りに打つやり方もある

それは私の「知らない世界」だった

スレ違う人々は全く『眼が見えないが』悲壮感など微塵も
ない
きっと私が車いすに座っていることも何ら変わらないんだ
と思った

人それぞれの『世界』があっても
知ろうとする『想い』があれば『世界』は無限に広がる,,,

『眼が見えなかったら,,,』

もしも
眼の「見えない自分」を想像してみた

生まれた時から
光を感じ
色も感じられ
音の怖さも
眼で追って
それが何なのかが
わかり「安心していた,,,」

生まれながらでもなく途中からでもない

もしも
『眼が見えていなかったら,,,』

そう思うと
体が震えるくらい自分を見失っていたら
見えることが
どれほど有り難く
心が喜びに変わり
感謝に溢れたら

暗闇の中を
音や凹凸を頼りに
足を進める人々がいる

点字ブロックの上をなぞるように 白棒が「コツコツ」と
確かめている

一列にならび 仲間の手に引かれながら
楽しく笑う人々を見かけた

「彼らに不安はないのだろうか,,,」

あっても
仲間とならその「不安」がすべてを変えてくれる

『眼が見えていなかったら,,,』ではなく

見えなくても「安心」できる関わりを,,,

誰かがあなたの「眼」になってあげられたら,,,

出来ない事が「不自由」ではなく
関わりが「自由」に変えてくれる,,,

『記憶力』

私もパソコンの光に眼が開けていられないくらい辛くなる

それ以来
LED の光も
液晶画面も
耐えられなくなった

時代に取り残されるように
次々私が使えていた物が切り替わってくる

私は時代遅れのアナログ人間

ある時
試験のために
教材をテープに録音してもらった

何度も聞くが
歌のように覚えられるい,,

難しい言葉はいつも活字をみて「記憶」していた

読むというより「眼でみて暗記」する

その癖に慣れていて私には「記憶すること」が辛かった

眼で見えない人々は
どれだけ凄い「記憶力」をもっているんだろう,,

『線は』

一心不乱に
ペンを走らせる

それはゆっくりと,,,
一見勢いをつけて描かれたものと思ったら

音楽に合わせ
線はどこまでも
続いていく,,,

彼女の暮らしの一部にペンを走らせる

理由なんてない
画面から浮き出てくる
何物かがなんであるか
誰にもわからない

無数の線は
時に人の顔にもみえ
時に人の心臓にも思える

それが
誰でもない誰かが
そこに存在している

『心の眼』

目の前の
大きな粘土の塊が

眼が見えない人々が作ったとは思えなかった

手探りで
まるで小さい子供のころに
「泥んこ遊び」に夢中になっていた想いが甦ってきた

縄文土器のような
激しい炎と戦いを挑んだ情感の作品もあれば , , ,

人間の体を極限まで削ぎ落とされたような「塊」にも見えた

「かたち」は人々の心を表現していた

どれも
圧巻過ぎる迫力が
私に迫ってきた

眼で作品を作るのではなく「心, , ,」

心から伝わる「心の眼」を私は感じた, , ,



